

沖縄の海とロマン

海を見ると加山雄三（歌手）を思い出す。果てしなく広がる海を舞台に男の夢とロマンを歌い上げる。そこには生きる勇気と希望があった。そして私もそうであったように誰しもが人生に悩む若き青年時代を演じたであろう。希望と絶望が交差する中で海を目の前にした時、ちっぽけな自分の苦悩を恥じたこともあった。

私のカラオケのレパートリーの中に加山雄三の「海・その愛」（岩谷時子作詞 弾厚作作曲）がある。

「♪～海に抱かれて 男ならば たとえ破れても もえる夢を持とう 海に抱かれて 男ならば たとえ独りでも 星をよみながら 波の上を 行こう 海よ俺の海よ 大きなその愛よ 男の想いをその胸に抱きとめて あしたの希望を 俺たちに くれるのだ ～♪」



沖縄の海は青かった。私の育った神戸・須磨海岸や明石海峡あたりの海の色とは違い、エメラルドグリーンという表現が適切かも知れない。この歳になって海水浴を楽しみたいとは思わない。しかし子供の頃に戻って海と楽しく遊んだあの頃に思いを馳せたい。そんな気持ちに沖縄の海は私を誘ってくれる。

遠くの海に小さな島があった。更に遠くにヨットや船が浮かんでいる。目の前にはウィンドサーフィンで波の上を滑っている。暫し沖縄の海を眺めつついつの日か命尽きるその日まで、男のロマンを夢見続ける私でありたいと誓った。

撮影 2011 年春

